

concept



Hope Lights Our Way

希望の道を、つなごう。

東京2020聖火リレーのコンセプトは、Hope Lights Our Way / 希望の道を、つなごう。です。支えあい、認めあい、高めあう心でつなぐ聖火の光が、新しい時代の日の出となり、人々に希望の道を照らしだします。

聖火リレーとは



ギリシャ・オリンピアの太陽光で採火された炎を、ギリシャ国内と開催国内でリレーによって開会式までつなげるものです。オリンピックのシンボルである聖火を掲げることにより、平和・団結・友愛といったオリンピックの理想を体現し、開催国全体にオリンピックを広め、きたるオリンピックへの関心と期待を呼び起こす役目を持っています。

聖火リレーの歴史



近代オリンピックでは、パリ大会(1924年)まで聖火はありませんでした。アムステルダム大会(1928年)の際、スタジアムの外に塔を設置し、そこに火を灯し続けるという案が採用されたことが契機となり、現在のような聖火が誕生しました。聖火は大会の数か月前に古代オリンピックの聖地であるオリンピアの遺跡であるヘラ神殿前で採火されます。その後、多くの人によって開催地まで運ばれ、開会式当日に、最終ランナーによってメインスタジアムの聖火台に点火され、大会が終わるまで灯し続けられます。

高知県での聖火リレールート



1日目 4.19 sat

高知市＞いの町＞土佐市＞須崎市＞梶原町＞四万十町＞四万十市＞四万十市＞土佐清水市＞宿毛市

2日目 4.20 sun

南国市＞北川村＞香美市＞田野町＞香南市＞安田町＞安芸市＞奈半利町＞室戸市＞東洋町＞高知市



高知県での聖火リレーは、高知市桂浜の坂本龍馬像の前から出発し、県西部に向けて進み、宿毛市で1日目のセレブレーションが実施される予定です。2日目は南国市を出発し県東部を巡った後、高知市でセレブレーションが実施される予定です。



体力も学力の1つ

伊井野さんが四万十町に来たのは、教頭先生として北ノ川小学校に赴任してきたとき。当時、北ノ川小学校では冬の期間だけ朝マラソンを実施していたそうですが、伊井野さんはそれを年中走るようにしたそうです。「朝走ると身体が起きて勉強にも集中できるし、かぜをひく子も少なくなる。体力も学力の1つだと思う。」と、教育現場で働いていたときの想いを話してくれました。そして伊井野さんが最後に教頭先生を務めたのは影野小学校。4・5・6年生の体育を受け持ち、体育の授業の始まりには必ず毎回1,000mのタイム測定をするようにしたそうです。雨の日には体育館の中でシャトルランをするという徹底ぶり。「はじめは嫌がる子もいたし、走るのが嫌な子はほんとに嫌だっと思う。」それでも伊井野さんは曲げることなく継続。子どもたちのタイムを月ごとに記録し校内に貼り出していたそうですが、だんだんと記録も伸びていき、走ることが苦にならず、かぜをひく子も少なくなったと話してくれました。そして、「最初は歩いていた子も6年生になったときにみんなのお手本になるくらい競い合っって一生懸命走る姿が嬉しかった。」と、笑顔の中にもどこか懐かしむ表情で語ってくれました。

教え子たちからのサプライズ

伊井野さんが教員を退職する際、教え子である影野小学校の卒業生が集まり、労ってくれたそうです。中学生でみんな忙しいのにわざわざ集まってくれたのが嬉しかったと話す伊井野さん。大会のときには必ずつけて走るという「赤い帽子」は、その時に教え子たちからプレゼントされたものだそうです。



走ること、走る楽しさを伝えたい



初めてのフルマラソンとなった高知龍馬マラソンを完走したときの感動は今でも忘れられないという伊井野さん。聖火ランナーとして走ること、教え子たちにも走っている先生の姿を見たらとも話してくれました。新たな時代と未来に向けて、いよいよ世界の灯が、四万十町を駆け抜けます。

4.19 sat
13:01 start

走ることの楽しさを、子どもたちに伝えたい。

四万十町からの聖火ランナー | 伊井野 太志 さん



聖

火ランナーとして少しでもオリンピックを盛り上げることに参加できたら、人生の記念になると思って。」と話す伊井野さん。小学二年生のときに開催された前回の東京オリンピックでは、現地やテレビで直接見るからこそ叶わなかったものの、学校でオリンピックの映画を見たことを今でも覚えているそうです。「自分が生きている間に二回も東京でオリンピックが開かれるのはすごい。少しでも関わることができたらいいなと思った。」と話してくれました。そんな伊井野さんが走るようになったのは、小学校の教頭先生を務めていたとき。PTAの方がマラソンをしていて、大正で毎年行なわれる駅伝に誘われたのがきっかけだったそうです。そこから高知龍馬マラソンにも誘われて初のフルマラソンに挑戦。最終関門では制限時間ギリギリになったそうですが、子どもたちにも言っていたので完走しないと！という想いできるとか完走できたと話してくれました。そこから四万十川桜マラソンやウルトラマラソンにも挑戦。そして伊井野さんが大会のときに毎回必ずつけて走っているという「赤い帽子」。そこには先生としての伊井野さんのある考えと、子どもたちとの素敵な思い出が詰まっていました。